

# サイクリング部に一言

2年建築組 吉田弘行

部誌の制作のために、部員全員がレポートを提出するに当り、私は何を書こうかと、日夜懸命に考えた。サイクリングに関して書くのであるが、あまり自転車に乗るわけでもないのど、私自身の感じているクラブ活動について独断と偏見を排して考えこみる。いろいろな非難も生じる可能性があるが、これは私の思っていることなので、一個人の意見として聞いてもらえれば良い。部内には理屈っぽい人がいるのが気がかりである。大いに反感を排していただければ結構、同感してもらえれば私は幸福者である。

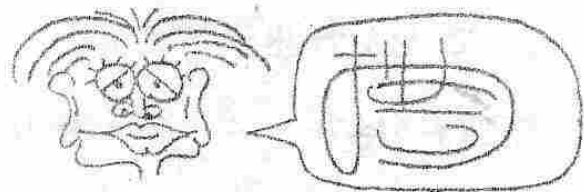
まず合宿について一言。合宿の時期になると必ず、合宿のあり方について激しい議論が起こる。これは、合宿というものに対して、部自体、はっきりとした目的を排していながら、たために生じてきたのだと思う。また部員も合宿に参加する必要性を十分感じと、いながらと思う。今年の夏合宿で、私達の班はたいへん楽しく有意義な合宿を過ごした。その原因は、班員が意見統合して、先輩、後輩という関係も必要以上になくしたことである。また、班員が同じ目的を排して合宿に参加したのも大きい。しかし、他の班では、大金を払っても楽しい合宿が出来なかつたと報告している人がいた。その班では、気心知り合わない者同士で参加したのが失敗ではないだろうか。もし先輩は後輩に対して、

威厳を示す態度を大ぴらに出してはいけないと思う。そこで合宿  
についての結論として、合宿での班編成は、目的地別に分けるの  
ではなく、仲の良く、気心の合った、そして合宿の目的を同一に  
している者同志で班編成をするのが最も良いと思う。その目的と  
して、観光地巡り班、走りに徹底する班、観光地で友達を多く作  
る班など色々ある。私は、後者を望む。後者を望むのは私自身、  
は、きりした理由がある。それは、出会いである。人生において  
最も大切にしたいのは出会いであり、良い出会いを願うのは人間  
である限り必ず持ち合わせているのである。というわけで、来年  
の春合宿では、この班を実現させたいし、実現させる自信を持  
ている。

次に、トレ・ニゴブだ。トレには1年から3年まで全員参加す  
るということが部会で求ま、たはずだ。しかし、これまでの出席  
状況は、あまり芳しくない。特に3年であり、そして部を作りあ  
げている組織部である。そしてトレを欠席する時は勝手な理由で  
片づけると言う。もっとトレに参加して体を鍛えよう。部会で可  
求されたことを守らないのが、今の部の最も悪いことである。そ  
の部会もただ、だらだらしていてくたらない。部会の出席率の悪  
いのも仕方ないことである。

近頃、部室で女の話がかかり聞こえる。男で生まれてきた以上  
女を愛することは男の義務である。女のことか話題になるのが当  
然であり、自然なことである。はるかかたらず、ある人がある人

に対して、女かぶれをしてだらしない」と言、たえうだ。言、た  
 本人をせめるわけではないが、その人の女性観を聞きたくなる発  
 言である。学業に専念してもいいし、自転車に専念してもいい。  
 しかし、この発言だけはうなずけない。私は良く女性の話をして  
 いるが、その時もある人から、にらみつけられたことがあ、た。  
 なぜ女性の話をしてはいけないのだろう。なぜ女かぶれをしては  
 いけないのだろう。私にはさ、ぱりわからない。1年のX君も同  
 じようなことを言、ていた。学生時代でなければ出来ないことは  
 たくさんある。その中に女性との交際も必ず含まれているはずで  
 ある。さあみなさん、青年時代は2度とはもど、て来ないのです。  
 楽しい時代はし、ょうではありませんか。THE END DASU.



空白を利用して、

- 西口君へ 「また、ふられEののですか。そろそろ、1人くらい友達を  
 つくりなよ。」  
 渡辺君へ 「おまえ、その顔じゃだめだよ。目をぱ、ちりあ  
 けろ。そうしないと、女も寄りつかんぞ。」  
 志来君へ 「栗年、富士山登頂がんばろうな。しかし、その  
 髪型が急にいらんなあ。」  
 高野君へ 「XXちゃん、いらないのなら俺によこせ。俺は  
 らかわいが、て大切にしてくれよ。」  
 金井君へ 「2才は間近です。そろそろあせ、た方がいいの  
 じゃないかなあ。」  
 名取さんへ 「無事、測量学の単位が取りました。どうもあり  
 がとうございます。またよろしく。」  
 金谷さんへ 「あまり手を出さない方がいいと思います。相手  
 の方がいいだろう。」

お詫び...夏合宿で一人の女性に対して、嘘、偽りの暴言を吐い  
 たことをお詫びいたします。でも「俺と結婚する女性は  
 幸せだなあ。かわいが、てやろ、と！」